

【要旨】

日本画教育における川端玉章作品の役割 川端玉章筆《雪中群鴨》（東京藝術大学蔵）の模写と創作を通して

美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復日本画後期博士課程3年 川上椰乃子

【研究内容】

本研究は川端玉章作品が最後の円山派としてだけでなく、近代日本画教育という側面で大いに機能していたことを玉章筆《雪中群鴨》（東京藝術大学蔵）の模写およびその応用制作を通して考察していくものである。

川端玉章（1842-1913）は京都に生まれ、円山派の流れを汲みながらも東京画壇で活躍した近代日本画における円山派最後の大家であり、東京美術学校や私塾、川端画学校等で教鞭を執るなど後進の育成にも尽力した人物である。同時期に同じく東京美術学校で教鞭を執っていた橋本雅邦（1835-1908）と比べられることも多く、雅邦が絵画の精神性（写意）を重んじていたのに対して玉章は筆が達者な技術が先行する作家として捉えられる傾向が強い。以上のことが現在一般的に知られる玉章の情報である。ここで玉章の代表作や独自性があまり語られていないのは技術が際立つ点にもあるが、日本画教育に軸足を置いた制作姿勢が根本にあるからではないだろうか。

玉章が教鞭をとった設立当初の東京美術学校絵画科では専門的な芸術家の育成を掲げ、特定の師による粉本や手本の模写を中心とした旧来の画塾的教育ではなく、多様な流派の手本を用いた「臨画」や、実物を見て描く「写生」、自身の意匠から新しい図案を作る「新按」という科目などが設置された。また、開校当初の5年制のうち初めの2年間の普通科でこれら実技教科に加え理科、数学、歴史などの一般教養や用器画法といった製図や図像学のような授業も設置された。これらの教育を受けた卒業生として横山大観をはじめとする近代日本画形成の担い手となる作家が多く輩出したことから、初期の東京美術学校での教育内容は日本画の発展を検討する上で非常に重要なものだといえる。学校制度と伝統の継承という一見すると結びつけることが難しい二者が、「講義」と「実技」という形でいかに近代日本画の構築へと繋がっていくのかを考察した。

《雪中群鴨／下図》は目録上では「下図」と表記されているが、熟覧調査を行った結果、本画と同等の精度で描かれていることや、絵具汚れなどの使用痕が著しかった点、《雪中群鴨》よりも後年になってから買入れられていることなどから単なる「本画」とその「下絵」という関係ではなく、「手本としての本画」と、学生が模写や細部の技法について詳しく学べるように活用されていた「手本の代用作品」という関係であることが推測された。これらを用いた教育によって目指された絵画を実技的観点から考察した。

なお、この代用作品の本来の目的は本画作品の技術習得にあるため、本研究で模写を行う作品は《雪中群鴨》とした。

本研究は明治期の日本画教育を実技的観点から考察することで、近代日本画誕生の流れの中に西洋画的表現と東洋的表現の融合という点だけでなく、それまでの日本絵画各流派の再構成という観点があることを視覚的に提示することができ、また最後の円山派と評価される川端玉章の美術史上での立ち位置に日本画教育における役割という新たな側面を見出した。

大正期に入ると川端龍子(1885-1966)の世相を反映した大作は「会場芸術」と批判され、横山大観(1868-1958)は伝統に回帰して従来 of 床の間における日本画として「床の間芸術」を、鏑木清方(1878-1972)はそれらに対し「卓上芸術」というより身近な鑑賞概念を提唱したように、近代日本画が構築される上での一つの特徴として芸術のカテゴライズがある。明治期は芸術が工芸(技術)的作品と鑑賞作品に区別されはじめ、鑑賞作品はそこに内包される技術性が表出するほど批判の対象となることがしばしばあった。川端玉章の《雪中群鴨》はそのどちらにも属さず、それ故に美術史に埋もれる存在となった。この教材としての性質を持つ作品が美術史上に間接的に果たした役割は非常に大きく、その根底にあるのは伝統表現の持つ柔軟性である。東京藝術大学で日本画を学んだ筆者自身が、実技的観点から東京美術学校での日本画学習の追体験をするという独自のアプローチによって《雪中群鴨》および近代日本画の新たな評価軸を加えることができた。

本論文は4章立てで構成する。1章・明治の日本画教育では明治期とそれ以前の日本画教育諸相について概括し、「東京藝術大学大学資料館蔵品目録・絵画Ⅱ」に記載される画像データと情報に基づいて東京藝術大学に収蔵される東京美術学校時代の学生作品のうち、卒業制作と授業制作の画題と表装形式をそれぞれ年代、系統別にまとめる調査を行った。2章・川端玉章の日本画教育では、川端画学校に関する資料と玉章門下である結城素明の技法書『新日本画講義』から玉章の教育法を推測し、東京藝術大学所蔵の玉章作品と初期卒業生作品の熟覧調査を行なった。3章・模写制作とその応用では1、2章での情報から《雪中群鴨》が教育現場で使用するのに適したものであったことを踏まえ、模写制作によって本作の技法、構造等を理解し、併せて創作作品(新按)の制作を行い、玉章の日本画教育による成果を視覚的に提示した。終章では以上を踏まえて玉章作品の美術史上での評価を再考し、本論の結びとした。